

施設入所患者の薬剤管理の問題点に対応した薬局薬剤師の取り組み

(大阪府) タイコー堂薬局箱作店

○峰篤司、椎葉亜季、福原延、田中有紀

【背景・目的】高齢化及び在宅医療推進の流れから、地域における医師の負担が大きくなっている。2013年11月応需先医院より、新規に担当する40名の施設入所患者の薬剤管理について相談を受けた。施設ではハイリスク薬など多剤服用している患者が多いなか、少ないスタッフでの服用薬の管理や医療者不在時の副作用対応など問題も多い。今回、これらの問題に対する取り組みについて報告する。

【方法】薬剤管理で問題が起こりやすい配薬と多職種間での情報共有について、以下の支援を行なった。①他院処方薬も含めた配薬ボックスの管理。②往診前に医師の指導のもと血圧・脈拍などの測定を行い、降圧薬などの効果を確認。多職種・患者からの情報収集の実施。③往診時に医師へ②の情報と検査結果を踏まえた処方提案の実施。④往診時の医師の指示内容や薬剤師からの副作用注意情報などを「お薬ファイル」に記載して、多職種と情報共有。

【結果】薬剤師が他院処方薬を含めた配薬ボックス管理を行うことで、セットミスによる服用間違いや服用忘れが減少した。患者のバイタル、ADL変化や検査値などの情報を収集しておくことで、副作用評価や追加処方の提案に繋がった。また「お薬ファイル」を用いて処方変更理由や起こりやすい副作用症状等を施設スタッフに情報提供することで、薬剤師不在時にも副作用を早期に発見し適切に対応することができた。

【考察】薬局薬剤師が往診サポート、配薬ボックス管理、多職種との情報共有を行う事により、施設での薬剤管理の安全性確保・効率性に寄与できる事が分かった。また、施設スタッフ間にも「お薬ファイル」の機能が認知され、他院処方薬情報を追記してくれるなど、情報共有の良いアイテムとなっている。今後もフィジカルアセスメントのスキルを活かした積極的な処方提案など、医薬品適正使用への関わりについて検討していきたい。